



## おすもうさんが帰ってきたよ。

「どうしたら、おすもうさんみたいに大きくなれるん?」「お父さん、お母さん、先生の言うことをちゃんと聞いて、好き嫌いせずいっぱい食べて、お外で元気に遊んだらなれるんよ」保育園児の質問に、ニッコリ笑顔で答えるちょんまげ姿の優しいお兄さん。彼は、福智町神崎出身の藤本悠介力士（阿武松部屋：幕下39枚目）です。九州場所は残念ながら負け越しましたが、11月27日に行われた地元保育園児との交流では、かわいらしい園児に力をもらいました。そして、みんなに「一生懸命いこして、来年はもっともっと強くなって帰ってきます」と力強く約束しました。次号では、藤本力士を詳しく紹介します。お楽しみに。

①毎日の厳しいけいこで鍛えた、藤本力士のたくましい腕に、大喜びでぶら下がる園児たち。  
②「おすもうさん、がんばっていっぱい勝ってね」かわいらしい園児の励ましに、力強い握手で応える。  
③「おすもうさん、待って、帰らんで」園児たち精いっぱい引き留めに、思わず苦笑い。



▼最近、新聞を見るたびに胸が痛くなる。小学校、中学校、そして高校においてさえも、い

じめやそれを起因とした子どもの自殺が連日のように報道されているからである。マスコミの論調は、一様に学校（教師）や教育委員会の対応の悪さを指摘しているが、果たしてそうだろうか。もちろん、子どもたちが日々の学校生活を明るく、豊かな気持ちで過ごせるように教師（学校）はその環境づくりに全力を尽くさなければならぬのは、言うまでもない。また、子どもが成長していく過程で、教師（学校）や地域のかかわりは欠くことのできない条件ではあるが、本当に子どもの様子を的確に理解し、把握できるのは、家庭（保護者）においてほかにないと思う。自ら、その生に終止符を打とうとしている子どもには、必ず普段と違った仕草があるはずだ。にもかかわらず、産み育てて10年以上も子どもと向きあってきた親が見過ごすということは、わたしには理解できない。生活が忙しく、働くことに精いっぱいかもしれないが、最愛の我が子の生死を分かたず状況を見極める余裕がないとは思えない。心をこめて、真剣に子どもを見つめていけば、いかなる場合でも解決の手がかりはつかめると思う。一寸とした手抜きが、大きな綻びを生じさせる結果となるかもしれない。わたしたち大人は、現在の現象（と言っても過言ではない）を警告として受け止め、家庭や地域のあり方をふり返り、子どもとの絆をより深めていきたいものだ。

浦田 弘二